

理事長 インタビュー

釜石シーウェイブスRFC理事長
佐々木 傳十郎

(聞き手：増田久土事務局長)

釜石シーウェイブスRFCは創立6年目を迎え、チームも事務局も新体制になりました。心機一転でシーズンに入るにあたり、佐々木傳十郎理事長に改めてシーウェイブスが目指すべきところを聞いてみました。

釜石と新日鐵釜石製鐵所

新日鐵釜石製鐵所（以下、製鐵所）は釜石のスポーツ振興の中心でした。全国的に野球の普及率が高い中、製鐵所は野球部に続いて1959年にラグビー部を創部しました。赤いジャージに身を包んだラグーマンは「北の鉄人」と称され、1985年の第22回日本選手権で前人未踏の7連覇（V7）を成し遂げたことはいまでもありません。

釜石シーウェイブスRFC（シーウェイブス）の前身である新日鐵釜石ラグビー部（新日鐵釜石）がV7を決めた10年後、宿敵の神戸製鋼がV7を決めました。不謹慎ですが、翌年、釜石市民をはじめ、新日鐵釜石ファンは神戸製鋼の8連覇をなんとか阻止してほしいと願っていました。皆、新日鐵釜石を誇りに思っていたからです。

ホームグラウンドである松倉グラウンド（釜石市甲子町）は高炉から出る鉱さいを運び出し、甲子川の河川敷を埋め立てて造られました。松倉も昭和園グラウンド（同市中妻町）も製鐵所が整備し、現在の市庁舎も新日鐵からの寄付金で建てられました。釜石市は何でも製鐵所に頼んだし、製鐵所も頼まれれば何でもやってくれていました。製鐵所の影響が非常に大きく、釜石と製鐵所は表裏一体でした。

ラグビー部の岐路とクラブチーム誕生

製鐵所が全盛のころ、釜石市は企業城下町として財政は潤い、人口も最大9万3000人までにのびました。ラグビーをはじめ、釜石の新しい文化は製鐵所に働きにきた人々が形成しました。ところが、釜石で洋式高炉100周年の記

念行事が盛大に行われた直後、新日鐵の大合理化が発表されました。湾口防波堤、公共ふ頭、新仙人峠道路の建設（すべて2007年完成予定）などの公共事業は製鐵所ありきで考えられ、製鐵所が釜石のすべての中心となって動いていたのに、釜石に残ったのは棒線部門だけ。今では人口は4万3000人まで減り、私を含めて高齢化率が30%を超えて街は疲弊しつつあります。

製鐵所が縮小され、2000年にラグビー部が岐路に立たされた時、釜石でチーム存続を望む声が上がりました。市民や関係者の努力によって日本のラグビー界で初めて「釜石シーウェイブスRFC」というクラブチームが誕生し、縁あって理事長に就任しました。ラグビーは旧制盛岡中学（現盛岡一高）時代、体育の時間にやったぐらいの素人で何もわかりませんでした。知名度が高いトップクラスのチームをなくすのは惜しいと思い、引き受けました。

釜石とシーウェイブスのこれから

製鐵所があることで特立していた釜石は、きわめて安全で、いわゆる普通の地方にはない先駆けた文化を誇りとしてきました。現在の製鐵所も、かつての不況時より業績がよく、街も元気で安全で希望が持てる街にと再出発をはじめています。シーウェイブスはそういう街に生きています。

釜石はその名を聞いて「新日鐵釜石」や「北の鉄人」とこたえる人が多いほど、「ラグビーの街」として全国的に知られています。みんなシーウェイブスのサポーターになってくれればいいですが、そこまではなかなか…(笑)。サッカーは日韓共催ワールドカップの時、日本が1次リーグを突破して随分盛り上がりましたが、シーウェイブスも強くなれば、自然とサポーターがついてくるはずですよ。

クラブチームになって多くの企業とスポンサー契約を結んでいますが、スポンサーによってシーウェイブスが育てられるし、シーウェイブスの価値が上がることによって、スポンサーの宣伝になるという相乗効果があります。昨年